

三つの「ナラティブ(語り)」が交わる場所 : 特別企画の趣旨について

MORIMURA, Osamu / 森村, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2017-04-01

巻頭言

三つの「ナラティブ（語り）」が交わるところ——特別企画の趣旨について

森村 修

今回、二〇一七年『異文化一八』の新しい試みとして、三つの特別企画を用意しました。一つ目は、二〇一六年度をもってご退職される川村湊教授の特別インタビュー「川村湊」というスタイルです。川村先生は、新学部開設準備委員長として、一九九七（平成九）年以来二年間「国際文化情報学部」開設に向けてご尽力されました。様々な経緯を経た後、一九九九年四月「国際文化学部」が開設され、二年間、初代学部長をお務めになりました。このたびご退職にあたって特別にお時間を取って頂き、ご自身も卒業生（法学部政治学科卒）として川村先生と法政大学との関係、国際文化学部開設に至る際のご苦労など、様々なお話を伺うために、特別インタビューをお願い致しました。

二つ目は、大学院国際文化研究科・国際文化学部連携企画として、大学院と学部の執行部四名の先生の座談会「大学院と学部、これも異文化コミュニケーションか？」です。メンバーは、大学院から松本悟教授、佐々木一恵准教授、学部からは榎木玲子教授、興石哲哉教授の四人の先生にお願い致しました。特に四人の先生方の腹藏ないご意見から、現在の学部と大学院との連携に伏在する多種多様な問題を垣間見ることができます。座談会の司会者として、異文化コミュニケーションの難しさは、わざわざ海外に行く必要もなく、充分に実感できることなのだなどあらためて実感した次第です。

三つ目の特別企画は、「文化情報学とは何か、何であるべきか」と題して、大嶋良明教授のお話を伺っています。大嶋先生は、国際文化研究科では「多文化情報空間」領域の科目を担当され、また国際文化学部「情報文化コース」や「表象文化コース」では情報科学の分野だけでなく、マルチメディアに関わる科目や、メディア・アートに関わる科目をご担当されています。特に、私との対談では「文化情報学」の可能性を追求されています。

これら三つの特別企画のテーマや「ナラティブ（語り）」は、一見すると関係がないように見えます。しかし実際には、これらは相互に深く密接に関わっています。私が特別企画を組むにあたって念頭に置いたのは、「文化情報学とは何だったのか」、そして、「国際文化学部とは、本来ならば、「国際文化情報学部」として開設されるはずだった」という思いです。

というのも、先にも触れたように、国際文化学部には、「文化情報学」を学び、「国際社会人」を養成するという教育目標を掲げて、一九九九年度に開設されたという「過去」があるからです。そして、本学の「文化情報学」の提唱者こそ、川村湊先生だったのです。川村先生は、『異文化』創刊号の「巻頭言」で、「文化情報学」について、次のように論じられています。多少長いけれど、引用してみます。

「文化情報、あるいは文化情報学とは、新しい概念であり、新しい学問分野である。（中略）文化情報学を「文化の情報学」としてとらえれば、「広大な知の領域を覆う学問」である情報学の「文化的側面」を特化、集約して研究対象とする分野とすることができる。（中略）文化情報学を「文化情報の学問」と定義することも可能であり、その場合は、これまで「文化」としてとらえられてきたものを「文化情報」として読みかえること、言いかえれば「情報化」された文化についてだけ研究することが「文化情報学」の対象・関心領域となる。「情報化」されるというのは、何らかの記号化、象徴化、あるいはメディアによる複製化、伝達・広報化、記録化というプロセスをたどっているということである。／ここで改めていっておかなければならないのは、情報は加工され、編纂、編集されてはじめて「文化情報」となりうるということである。（中略）現在のメディアの過剰なまでの発達は、あたかもメディアそれ自身が情報の主体であり、主催者であるかのように振る舞うのである。そこでは、情報の流通の主体が誰であるかはつきりとさせる必要がある。もちろん、それは情報やそれに基づく表現の主体の「私」にほかならない。情報主体、研究主体を見誤ることは、その情報や研究の価値をゼロにしてしまうことである」。

長々と引用したのは、川村先生が「文化情報」あるいは「文化情報学」をどのように考えておられたかを、川村先生の文体とともにお伝えしたかったからです。川村先生の「文化情報」の定義を、私なりに敷衍するならば、次のようになるでしょう。

私（＝森村）は、『異文化』から川村先生の文章の一部を、この企画紹介文の中に引用しました。そうすることによって、その文章は、新しい文章の書き手である私によって編集されて、別の意味を持ち始めます。というのも、川村先生の「巻頭言」はもつと長く、複雑に入り組んでおり、

様々なテーマを縦横無尽に横断し、学問的な領域を越境していますが、私の引用から、そうした内容を知ることができなくなるからです。私という「文化情報」の編集者は、先生の「巻頭言」の一部の文章から「文化情報」という言葉を選び出し、それが書かれている箇所を特化するために、全体の文章を改変し（具体的にいえば、省略を行ない）、組み替え（／）を用いて段落を結合させ）、私の文章の中に引用し、私の書いた他の文章と接合／節合せたのです。確かに、引用された文章は、川村先生の文章でありながら、もはや川村先生「だけ」のものではなくなります。ここで重要なのは、私が実際に「編集」という作業を通じて、川村先生の文章を「文化情報」として扱い、別の「文化情報」として発信しているということなのです。

しかし注意しなければならないのは、本来の川村先生が「巻頭言」で書かれていた「原水爆」や「原子力」、さらには「放射能」の問題や、「放射能」の恐怖から生みだされた映画の『ゴジラ』や、原子力の平和利用の格好のイメージとして流布した『鉄腕アトム』の分析はすべて割愛されてしまったということです。新たな「文化情報」の編集者である私は、川村先生の文章の中から「文化情報」に関する記述のみを抽出することで、「巻頭言」で書かれていた内容のほとんどを切り捨てたのです。つまり、これが「文化情報の編集」であり、いわゆる「文化情報の加工」なのです。編集や加工には、新たな書き手にとって都合の悪い内容や、不必要だと判断されたコンテンツが隠蔽されたり消去されたりすることは当たり前なのです。書き手・川村湊の文章は、読み手であり、情報の編集者でもある私によって加工・編集されるだけではありません。「文化情報」を新しく発信する主体／情報の流通の主体としての私によって、まったく異なる「文化情報」としても発信されるのです。川村先生の「文化情報」は、新しい「意味」を生むと同時に、本来の「巻頭言」で書かれた重要な事柄が消去され、隠蔽されて、伝達されるのです。すなわち、「文化情報」の編集・加工とは、ある文化情報を特化するために、他の情報を切り捨て、隠蔽することを不可避的に担うともいえるのです。

「文化情報」という点について、第二の特別企画との関係でいえば、大学院国際文化専攻は、国際文化学部教育・研究を高度に発展させることで、グローバルに活躍できる人材を養成することを目指して、二〇〇四年度に人文科学研究科内に修士課程として設置されました。その後、二〇〇六年度には、博士後期課程を設置するために、単独の研究科として国際文化研究科が発足しました。国際文化研究科は、表面的には「文化情報学」を唱ってはいませんが、異文化相関・多文化共生・多文化情報空間という三つの領域を複合的に研究するという教育目標は、「文化情報学」の理念と多くを共有しています。しかし、私から見れば、学部や研究科の名称に「情報」という文言がないということそのものが、ひとつの「文化情報」の加工であり、その後の国際文化学部や国際文化研究科の行く末を暗示していたといわざるをえないのです。というのも、

国際文化学部や国際文化研究科を目指す方たちや、学部成立の歴史をご存じない方たちは、「文化情報学」という概念も知ることができないからです。学部や研究科のカリキュラムに「文化情報学」という科目や「多文化情報空間」という領域があることを知っても、それが「文化情報学」を学ぶひとつの場であることまで思い至ることはありません。学部名や研究科名から「情報」という言葉が消えたとき、「文化情報学」という形も実体もなかった学問も、その名称もまた忘れられる可能性があるのです。

三つ目の特別企画についていえば、大学院も担当されている大嶋先生が「文化情報学」について熱く語っておられます。川村先生の学部開設の趣旨に大いに賛同された大嶋先生は、本学部にIBMから移籍されたことを幸せだったと語られ、現在の状況から「文化情報学の現在と未来」を見据えておられます。学部や研究科の名称からは、「文化情報」という学問や研究が知られなくとも、「情報文化コース」という言葉の中に「情報」も「文化」も書き込まれていることは重要だといわれます。

情報学と聞けば、よくて情報科学、悪く言えば、コンピュータの上手な使い方と同義だとか考えない浅薄な理解は別として、私たちは、もはやネット空間を抜きに日常生活を送ることはできません。知らず知らずのうちに、私たちは、言葉や映像・動画など、様々なメディア（媒体）を介して他者の「文化情報」を編纂し、編集し、改変し、発信しています。私たちは「多文化情報空間」の中を行き来し、リアル／バーチャルという二項対立そのものもはや「文化情報空間」の中では意味をなさない状況を生きています。

大嶋先生は、「われわれにとって情報とは何か？」（『異文化別冊 国際文化情報学とは―その可能性と課題』、二〇一〇年）の中で、「文化情報学のフィールドとしてのネット社会とはインターネットそのものではない」と注意を促した後、次のように言われています。

「ネット社会とは生活圏としての現実世界とバーチャルな文化圏としてのインターネットが、コンピュータや携帯電話など複数のゲートウェイ装置によって接合された情報空間と考えるべきであり、このような世界を多文化情報空間と呼ぶ」。

大嶋先生の言われることを私なりに再編集するならば、私たちが生きている世界そのものが「多文化情報空間」であり、そのなかで生きる（生活する）こと自体が、否応なく「文化情報」の加工・編集／消去・隠蔽に関わっているということ。私たちは「文化情報」の行き交う「多

文化情報空間」の中で一喜一憂して生活しながら、様々な「文化情報」を再編集したり、変更したりします。それと同時に、先に述べたように、私たちは、「文化情報」の隠蔽も消去も、意図的にも無意図的にも行なってしまうのです。ちなみに大嶋先生は、先の論文の中で「ネット社会に対する一種の危機意識をもってわれわれは文化情報という概念を必要とするのである」と述べられています。

以上からもお分かりのように、三つの「ナラティブ（語り）」の趣旨は、未だ実現されていない「文化情報学」という理論的実践を少しでも顕在化させることにありました。国際文化学部も国際文化研究科も、「国際文化情報学部」という《幻》の学部の嫡出子なのです。しかし、「国際文化情報学部」開設準備開始から二〇年近くの時間が経過しました。その間に、「国際文化情報学部」で提唱していた「文化情報学」という言葉は、他大学で実際に実現されました。ただ、それは川村先生が創案した意味とはまったく異なる意味を持ち始めています。例えば、「文化情報学」を学部名称として用いているのは、同志社大学と椋山女学園大学です。特に同志社大学「文化情報学部」（二〇〇五年開設）は、データ処理やデータ解析を中心にした「情報（科）学」を念頭に置いているように見えます。それが端的に表れているのは、同志社大学文化情報学部の英名“Faculty of Culture and Information Science”です。ちなみに椋山女学園大学文化情報学部（二〇〇〇年開設）の英名は、“School of Culture-Information Studies”となっています。両校のホームページを見ると、「文化の情報学」という考え方はあっても、「文化情報の学」という考えは存在していないように見えます。

いずれにせよ、時代の変化と「文化情報」の加工・編集の結果として、「文化情報学」という概念には、様々な新しい「意味」が付け加わりつつあります。そして、「文化情報学」という学問名称もまた、ひとつの「文化情報」として、編集主体の欲望や意志に伴って、多様な文脈に接合／節合されたり、消去・隠蔽されたりしていきます。

『異文化』編集の担当として、こうした状況の中で、川村先生のご退職をひとつの契機として、ひとつの区切りを付けられたらと考えました。これまでの国際文化学部・国際文化研究科とは何であったのか、そしてこれからの国際文化学部・国際文化研究科とはどのようなのか、あるいはどのようなようになるべきなのか。一九九九年度開設メンバーのひとりとして、また二〇〇〇年『異文化』創刊号に川村先生の「巻頭言」を頂いたとき、編集作業に司修先生、故・大石智良先生、田澤耕先生と四人で携わった私としては、川村先生のご退職にインタヴューができたことを喜ぶと同時に、これらのことを考える機会を設けたいと考えたのでした。そして、私の独断による三つの「ナラティブ（語り）」を『異文化一八』の紙面を借りて実現させて頂きました。

それぞれの「ナラティヴ（語り）」には、最低限の語句修正や、記憶に頼った不正確な記述、場にそぐわない発言の修正以外、ほとんど手を加えてありません。読者の方々には、先生方の忌憚ないお考えを熟読玩味して頂き、これからの「国際文化学部」と「国際文化研究」という「多文化情報空間」の中で、様々な「文化情報」の編集・加工／消去・隠蔽を实践して頂けたらと思います。